政大日本研究【第十三號】
2016 年 1 月，頁 21～47

日本語・中国語・英語話者在掌握事件狀態的模式與描寫事件狀態模式的相關性

伊藤創*・王蓓淳*

中文摘要

本研究以伊藤・王(2015)為基礎，將漢語、英語、日語母語者在掌握事件狀態時的焦點選擇模式作更進一步的分析，嘗試解釋各語言母語者在描述事件狀態時為何選擇不同的模式。在圖像描述調查中，我們發現英語母語者傾向以 Agent Focus 的方式描述事件的狀態，這傾向在漢語母語者身上略微降低，在日語母語者則最為薄弱。再者，若以事件中出現的參與者的性質進行比較，我們發現圖像中的參與者為無生物《$\overline{\text{Human}}$→Human》時各語言間的差異度會高於參與者為生物《Human→Human》時的狀態。

根據上述事實，本研究認為各語言的母語者在掌握事件狀態的機制如下:

(1)對英語母語者而言，〈Action Chain〉的起點是決定將認知焦點放在哪一個參與者時的重要要素。

(2)對日語母語者來說，與參與者的(心理)距離是決定將認知焦點的重要要素。

(3)對漢語母語者而言，決定要素不僅取決於與參與者的(心理)距離，時間順序原則(PTS)也就是事件發生的先後順序，也是決定認知焦點時的重要因素。

本研究同時也嘗試解釋造成各母語者選擇認知焦點時採取不同模式的原因。我們認為(A)英語與日語的各句法要素清楚，句法關係可明確表達，所以相較於漢語，英語與日語對時間順序原則的要求並不高。(B)日語和漢語是主題優先型語言，所以在選擇認知焦點上會偏向以與參與者心理距離上的遠近作為主要的選擇要素。

關鍵詞：事件狀態、掌握模式、時間順序原則（PTS）、Action Chain、（心理）距離、主題優先型語言

* 關西國際大學英語教育學科講師
* 開南大學應用日語學系助理教授

The Difference of Event Protective Between English, Chinese, and Japanese

ITO Hajime* ・ WANG Pei-Tsuen*

Abstract

In this study, We examined the result of the research conducted by Ito&Wang (2015), which shows that English speakers tend to focus on the participant in the event who is regarded as the starting point of the Action Chain, whereas Chinese and Japanese speakers focus relatively less on participants at the starting point but instead choose participants at the second point of the Action Chain as a focal point.

Analyzing those results, we suggest following principles function when these three language native speakers construe the events.

(1) English native speakers tend to focus on the participant regarded as the starting point of the Action Chain.

(2) Japanese native speakers tend to focus on the participant regarded as psychologically "close" to speaker.

(3) Chinese native speakers also tend to focus on the participant regarded as psychologically "close" to speaker as Japanese native speakers, though, they also construe the event following PTS (the Principle of Temporal Sequence).

While proposing those principles, we also insist the mechanisms behind them, which are A) In English and Japanese, syntactic relations are expressed with inflection or prefixes and suffixes, PTS regulate them less strictly than Chinese, B) Being Topic-prominent language, Japanese and Chinese native speaker tend to choose their focal points according to psychological closeness of the participant.

Keywords: Action Chain, psychological closeness, PTS (the Principle of Temporal Sequence), Topic-prominent language

* Associate professor of Kansai University

* Assistant professor of Applied Japanese Department in Kainan University

日本語・中国語・英語における事態把握の「型」と事態描写の「型」の関連性

伊藤　創*・王　蓓淳*

要旨

本稿では、伊藤・王（2015）による英語・中国語・日本語の各母語話者の事態把握の「型」を探るための各言語の母語話者による様々な画像の描写の調査の結果に基づき、各言語話者の「型」（特に焦点をあてる参与者の選択）について、その違いの要因を考察した。同調査では、英語母語話者は Agent Focus で描写を行う傾向が強く、この傾向は中国語母語話者、日本語母語話者の順で弱まること、さらに、《$\overline{\text{Human}}$→Human》と《Human→Human》の事態では、前者のほうが言語間の傾向差が大きいという事実が示されていたが、本稿では、これらの事実から、各言語話者の事態把握のあり方について下記のようなメカニズムが働いていることを示唆した。

(1) 英語母語話者にとっては、〈Action Chain の始点〉と想定されることが当該参与者に焦点を当てる重要な要素である。
(2) 日本語母語話者にとっては、参与者の〈近さ〉が焦点をあてるための重要な要素となっている。
(3) 中国語母語話者にとっても、参与者の〈近さ〉が焦点をあてるための重要な要素となっているが、その一方で、その把握のあり方が PTS に沿っていることも重要な要素となる。

さらに、本稿では、このように、焦点をあてる参与者の決定要因が三つの言語において異なる理由として、A)英語や日本語が、各統語要素の関係性を明示できるゆえに、PTS の規定が厳しくないこと、B）日本語や中国語が主題優先型であるために、参与者の話者との〈近さ〉が焦点をあてる参与者の選択の際に重要な要因として働くことになること、といった要因を指摘した。

キーワード：事態把握、時間順序原則（PTS）、Action Chain、（心理的距離）近さ、主題優先言語。

* 関西国際大学英語教育学科講師
* 開南大學應用日語學系助理教授

日本語・中国語・英語における事態把握の「型」と事態描写の「型」の関連性

伊藤　創・王　蓓淳

1. はじめに

近年、特に注目を集めている日本語は主観（主体[1]）的な事態把握（subjective construal）に基づいた描写を好み、英語は客観的な事態把握（objective construal）に基づいた描写を好むという池上（1981）の指摘は、その詳細については様々な議論がなされてはいるものの、その基本的な主張については、多くの研究がその有効性を支持、あるいは軌を一にしているものと思われる（森田 1989、金谷 2004、中村 2004、守屋 2010 など）。

日本語で好まれるとされる主観的な事態把握とは、「自らの身をその事態の中に置くというスタンス（池上・上原・本多 2005：514）」で事態を捉えることであり、一方、英語で好まれる客観的な事態把握とは、「自らの身をその事態の外に置くというスタンス（同：514）」による事態把握をいう。

この区別は、言語によってどちらかに限定されるというものではなく、一つの言語内において、いずれの事態把握に基づく言語表現も可能であり、また、その主観性・客観性には段階性も認められる。例えば、以下の３つの言語表現は、（1a）から（1c）という順で主観性の度合いが高まっている（客観性の度合いが低くなっている）が、英語という一つの言語の中でこれらのいずれの表現を用いることも可能である（Langacker 1990）。

[1] 本稿では「subjective」に対応する語として「主観的」という用語を用いる。特に認知言語学的な文脈では、「主体的」と訳されることも多いが、ここでは「主体性」に込められた様々な意味を排し、単純に話者あるいは参与者の目から見た、という〈視点〉に関する意味でのみ用いたいゆえ、「主観的」としたい。

（1）a. Vanessa is sitting across the table from Veronica.

b. Vanessa is sitting across the table from me.

c. Vanessa is sitting across the table.

（Langacker 1990: 17ff.）

（1a）の Vanessa は、事態を捉える主体（＝話者自身）なのであるが、その話者とは切り離された存在であるかのように、すなわち客体化された形で描かれており、三つの中では最も客観性の高い捉え方に基づいた表現といえる。（1b）においても同様に、やはり話者は客体化されて描かれているが、その客体化の程度は、話者を「me」とする（話者が概念化の対象と同一であることを示す）ことで少し弱められている。しかし両者は、話者は事態を捉える主体であると同時に、捉えられる事態の一部（＝対象）でもあるという点で共通している。より平易な言い方をすれば、自らを含めて、全ての参与者を俯瞰的に外から捉えている表現なのである。一方、（1c）では、話者は Vanessa の位置を示す参照点であるにも関わらず、言語表現としては現れない。話者は完全に背景化され、その目から見える知覚内容のみが概念化・言語化されており、三つの中では最も主観性の高い捉え方に基づいた表現といえる。

もちろん日本語においても、客観性の高い表現、低い表現のいずれも可能である。

（2）a. 私の前の席に座っていた男性が声をかけてきた。

b. 前の席に座っていた男性が声をかけてきた。

しかし、両者の使用頻度を比べた場合、英語では（1a）（1b）のような客観的な事態把握に基づいた表現の使用頻度が高く、（1c）のような主観的な事態把握に基づいた表現の頻度は低い。逆に、日本語

では（2a）のような表現は頻度が低く、（2b）のように主観的な事態把握に基づいた表現が好まれる。また中国語については、近年の研究の緒についたばかりであるが、比較的、客観的把握が好まれるという分析（徐 2011）や、時に主観的、時に客観的把握を行うという分析（単 2011）など、はっきりいずれの事態把握が好まれるというのではなく、英語・日本語の事態把握の両方の特色を持っているという分析が散見される。

こうした指摘の重要性は、各言語には好まれる表現の「型」が存在する（特定の言語形式の使用頻度の多寡）という〈言語〉レベルでの現象を捉えるにとどまらず、それを事態把握のあり方という言語表現に先立つ〈認識〉のレベルに押し上げ、この使用頻度の差に説明を与えようとしていることにある。これはすなわち、認識にも好まれる「型」が存在するということであり[2]、このことによって、様々な言語表現・現象（の言語間の違い）にも、事態把握のあり方という観点から統一的な説明を与えられる可能性が示されたからである。以下に、いくつかその例を見たい。

（3）（4）に示すように、同じような事態を描いた表現であっても言語間では様々な違いが見られるのは周知のごとくである。例えば（3）では、従属節の述語が英語では過去形（「came」）であるのに対し、日本語では非過去形（「出てくる」）であったり、（4）でも、同じく従属節の事態が、英語では能動形で描かれている（「made a lot of noise」）のに対し、日本語では受動態で表現されていたりする（「騒がれる」）。また（3）（4）のいずれにおいても、主節の表す事態の行為の主体が、英語では「I」という形式で明記されるのに対して、日本語では示されていない。

[2] 「〈事態把握〉とは、人が言語化に先立って「事態」を各言語の母語話者に応じたやり方で行うと考えられる認知的な営みを指す。言語の話者によって好む仕方が異なるものであり、言語形式の選択にも大きく関わっている（守屋 2010:29 下線筆者）」

（3）a. By the time food came, I got drunk.

b. 食べ物が出てくる前に、酔っぱらってしまった。

（4）a. My neighbor made a lot of noise all night, so I couldn't sleep at all.

b. 隣で一晩中騒がれて、一睡もできなかった。

こうした様々な違いを、事態を外から眺める客観的な事態把握を好む英語、事態に入り込んだ主観的な事態把握を好む日本語という観点から見れば、例えば、(3a) において、英語母語話者が過去形で従属節の事態を描き、一方、日本語ではそれを非過去形で描くことについては、英語母語話者は、当該の出来事を発話時点から切り離し、過去の出来事として客観的に捉えているために過去形を用い、一方、日本語母語話者は、過去の出来事であっても、その事態に経験者として入り込み、酔っぱらってしまった時点、すなわち料理が出てくる前の時点に視点を設定しているゆえに非過去形を用いる、と説明を与えることができる（樋口 2001 参照）。同様に、(4) においても、従属節の事態が、英語では能動態、日本語では受動態で表現されるのは、英語では、〈隣人が騒いだ〉という事態と〈私が眠れなかった〉という事態を、事態の参与者である〈私〉の目から離れて客観的に捉えるゆえに、両事態を別個の事態として述べる表現が好まれ、一方の日本語では、事態を経験している者の視点から捉えるために、〈それによって影響を被った〉ことを表す表現が好まれることの反映である、と説明を与えることができるのである。あるいは（3b）（4b）では、主体が表現されていないが、これは、話者が事態の中に入り込んで〈私〉の視点から事態を捉えている（従って自らの姿は見えない）からであり、一方、事態の経験者である〈私〉から離れ、その事態を俯瞰的に眺めている英語の（3a）（4a）においては、（〈私〉の姿は見えているので）、〈主体〉は明記されることになる。

このように、時制（tense）、あるいは相（aspect）形式の違い、態

（voice）の違い、概念主体（話者）の言語的明示の有無といった、個別に扱われてきた言語間の表現方法の違いは、各言語話者によって好まれる事態把握のあり方が異なるという認識レベルの特性の違いから、統一的に説明される可能性があるのである[3]。

本研究では、こうした可能性に鑑み、筆者らが行った日本語・中国語・英語母語話者による描写実験の結果（伊藤・王 2015）、そして伊藤（印刷中）による同調査結果の分析をさらに推し進め、これらの三つの言語話者が、事態のどの参与者に焦点を当てて描く傾向があるかという言語表現においての「型」の相違を、その焦点の向かう先を決定する要因という認識レベルの「型」から説明することを試みる。

2. 調査

2.1 調査の概要

まず、伊藤・王（2015）の描写実験の概要について述べる。同調査は、客観的な言語表現を多用する言語の話者は、本当に認識のレベルでも客観的な事態把握が優勢であるか（その逆も然り）、という言語現象の観察からの事態把握の推測を、従来よりも厳密な形で検証することを目的に行ったものである。

というのも、これまでの言語表現の違いから事態把握のあり方を明らかにしようという（あるいは言語表現の違いを事態把握のあり方から説明しようとする）分析の多くは、日英語の対訳の分析、あるいはコーパスデータから特定の表現形式の多寡の比較に基づいており、実際に話者がある事態を捉えた際の、そのリアルタイムの事態把握のあり方を十分に捉えきれていない可能性があるからである。対訳された各表現、あるいはコーパスデータから抽出された各

[3] ただし、筆者は、このような（言語間における）言語表現の違いを事態把握のあり方という認識のレベルの違いに帰する分析の一部には懐疑的であり、言語表現の違いは、部分的には、あくまで当該言語の言語的特徴によるものである可能性を指摘している。詳しくは、伊藤（2015）を参照されたい。）

表現には、それぞれ当該の表現が属するストーリーの流れがあるわけであって、そのテキスト性・一貫性（庵 2007）などを保つ必要があり、実際の一瞬一瞬の事態の捉え方がそのまま反映されているとは限らないのである（例えば、場面が変わっても、以前の主語、主題を保ったまま次に進まねばならない）。

そこで伊藤・王（2015）では、可能な限り文脈などの要素を省いた形で話者のリアルタイムでの事態把握のあり方(の言語間の違い)に迫ることを目的に、異なる言語話者に対して画像の描写を用いた調査を行った。この調査は、事態把握のあり方の中でも特に、話者が事態のどこの焦点をあてて捉えるのか、そこに母語によって違いがあるか、という点に考察の焦点を絞り、主観的・客観的事態把握という傾向差を論じる材料とするためのものである。

同調査の前提となるのは、〈主語〉として描かれる参与者は事態の中で最も際立っていると認知されているものである[4]という Langacker（1990）以降、認知言語学の中では広く支持されている分析である(尾谷 2001、谷口 2005、森山 2005、小野寺 2008 など参照)。この前提をもとに、話者が〈主語〉として表現する参与者から、その事態のどこに焦点を当てているのかを特定し、そこに言語による違いがみられるかを検証した。

具体的には、以下の図 1-1 のような、事態を引き起こす側の参与者（これを本稿では「Agent」と呼ぶ。図 1-1 で言えば、〈鮫〉にあたる）と、それによって影響を受ける参与者（Action chain の 2 番目：これを「Patient」と呼ぶ[5]。図 1-1 では、〈人〉にあたる）が存

[4] 従って、〈目的語〉あるいはその他として表現された参与者は、〈主語〉として表現された参与者より相対的に認知的際立ちが低いことになる。

[5] 「Agent」「Patient」という用語は、本稿においては、〈action chain の始点にあたる参与者〉、後者が〈Action Chain の二番目にあたる参与者〉という意味で用いる。例えば、図 1-1 において、「男性が鮫から逃げている」という描写をする話者にとっては、「男性」が〈Agent〉なのであるが、そのような意味役割的な意味（semantic role）ではなく、あくまで、描かれている事態の中で action chain の始点にあたる参与者を「Agent」と呼ぶ。そのような参与者の意味役割について言及する場合は、それぞれ〈動作主〉、〈被動作主〉という語を用いることに

在する画像 27 枚を用意した[6]。それらを日本語・中国語・英語の各母語話者に提示し、その内容をそれぞれの母語で描写してもらった（被験者は、日本語母語話者 62 名、英語母語話者 54 名、中国語母語話者 56 名の計 172 名）。

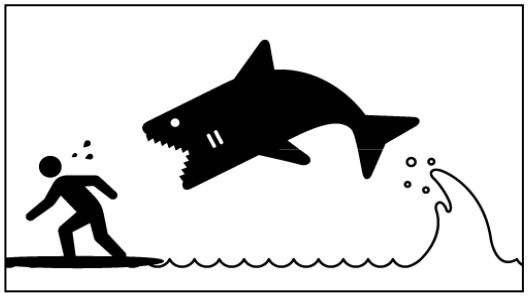


図 1-1

次に、その描写の内容を、1）Agent（＝action chain の始点）を主語として描いているもの（＝Agent に焦点を当てて描いているもの）を「Agent focus（AF）」）、2）Patient を主語としていて（＝Patient のほうに焦点を当て）、それを〈動作主〉として描いているものを（「Patient focus 1（PF1）」、3）Patient を主語とし（＝Patient のほうに焦点を当て）、それを〈被動作主〉として描いているものを「Patient focus 2（PF2）」と分類した[7]（その他は「others」[8]）。以下に図 1-1 についての、各分類の描写の例を示す（英語、中国語については others の例は割愛）。

する。

[6] 画像の選択には、筆者を含めて 3 人の研究者があたり、どの参与者に焦点をあてて描いてもおかしくない、と全員の意見が一致したもののみを使用した。

[7] ここでの分類は、どの参与者を主語に据えているか、受け身形で描かれているか、といった統語的な基準に基づいて行っている。また特に日本語では、主語の省略が頻繁に行われるが、こうした場合には、述語の部分から判断して明らかに主語が特定できる場合のみ（例「サーフィン中にサメに襲われた」なら主語は明らかに〈男性〉と考えられる）分類に含めた。

[8] （5d）のように、参与者に焦点があるとは思われるが、どちらに焦点が当たっているか判断しにくいもの、（5e）のように、そもそも参与者に焦点があたっているか判別しにくいもの、などはすべて「others」として分類した。

（5）a. サメが人間を食べようとしています。（AF）

b. サーフィン中にサメと遭遇してしまった。（PF1）

c. 男の人がサメに食われそうになっている。（PF2）

d. 襲ってくる鮫と逃げる人。（others）

e. まさかの展開。（others）

（6）a. A shark jumps from the water to attack a drunken man on the shore. （AF）

b. The surfer tries to flee as fast as he can. （PF1）

c. A guy's about to get eaten by a shark. （PF2）

（7）a. 鯊魚咬人。（AF）

b. 人在船上躲鯊魚。（PF1）

c. 人被鯊魚追。（PF2）

2.2 調査の結果

これらの分類をすべての描写について行い、それぞれのタイプの描写がどの程度の割合を占めるか（others にあたるものは除外）、またその割合の言語間での違いが有意なものであるか、カイ二乗検定を行った。例えば、上記の図 1-1 については、以下のようになる。

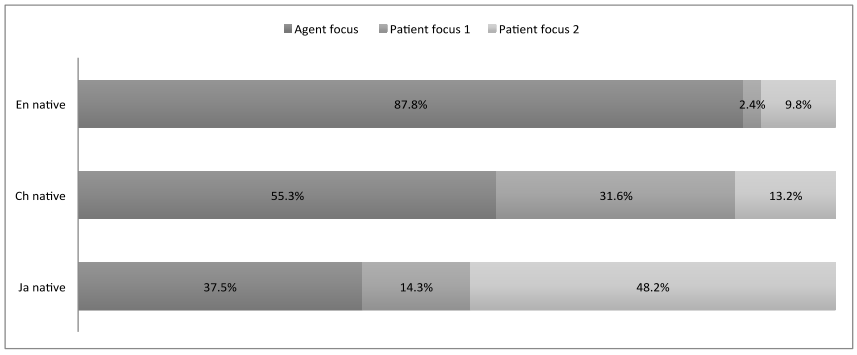


図 1-2 （$\chi 2$（4）=38.037、$p<0.1$）

図 1-1 については、英語母語話者は圧倒的に〈鮫〉に焦点をあてた AF の描写が多いのに対し、日本語母語話者は、〈人〉に焦点をあてた PF1、PF 2 の描写が多い。また中国語母語話者はちょうどその中

間くらいで、〈鮫〉、〈人〉に焦点を当てた描写がほぼ同じくらい存在する。

今回の調査で用いた 27 枚の画像のうち、各言語の描写のタイプの割合の差が有意であると判断されたものは、18 枚（66.7%）であるが、非常に興味深いことに、その多くが、図 1-2 と同じような割合を示した。以下にそれらの描写文を図とともに示す（AF、PF1、PF2 の中で欠けているものがある場合は、当該分類に当てはまる文が見られなかったということである）。

《$\overline{\text{Human}}$→Human》

以下に示す図 2-1、図 3-1、図 4-1 は、図 1-1 と同じく、牛、ゾンビ、強風といった〈人でない存在〉の行為が、〈人〉に対して向けられていると捉えられる事象構造（Event Structure）を持っている（以降、このような事象構造を《$\overline{\text{Human}}$→Human》と表記する）。

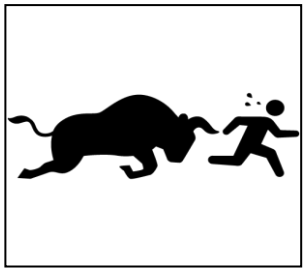


図 2-1

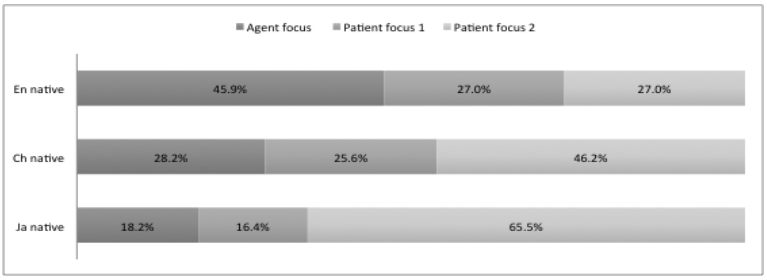


図 2-2 （$\chi 2$（4）= 14.103、$p<0.1$）

（8）a. 牛が人を追い回している。（AF）

b. 男の人が闘牛から逃げています。（PF1）

c. 猛牛に男性が追いかけられている。 （PF2）

（9）a. A bull is chasing a man. （AF）

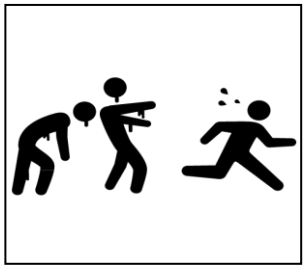
b. A man is running away from a bison. （PF1）

c. A man is being chased by a bull. （PF2）

（10）a. 鬥牛追著一個男生。 （AF）

b. 参加西班牙鬥牛節活動。（PF1）

c. 被牛追。（PF2）



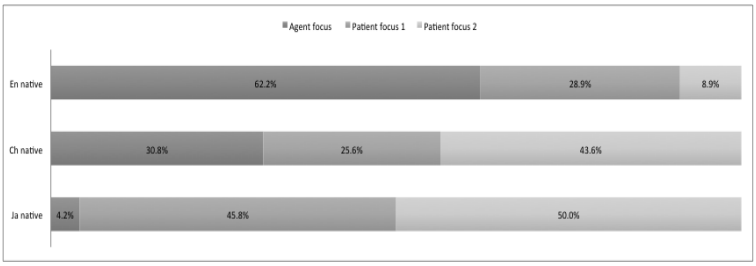


図 3-1　　図 3-2（$\chi 2$（4）= 40.717、$p<0.1$）

（11）a. ゾンビが襲ってきた[9]。（AF）

b. 男性が、襲い来るゾンビから逃げています。（PF1）

c. 男性がゾンビに追われています。（PF2）

（12）a. A bull is chasing a man.　（AF）

b. A man is running away from a bison.　（PF1）

c. A man is being chased by a bull.　（PF2）

（13）a. 僵屍襲城。　（AF）

b. 遇到僵屍好恐怖。　（PF1）

c. 被殭屍追。　（PF2）

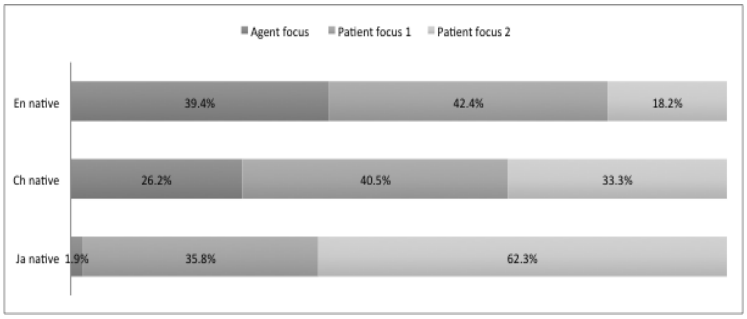


図 4-1　　図 4-2（χ^2（4）= 26.853、$p<0.1$）

（14）a. 嵐が吹き荒れています。（AF）

[9] 日本語話者による図 3-1 についての AF タイプの描写は二例でいずれも「襲ってきた」という襲われている側の視点に立った「てくる」を用いた描写であった。先述のように、本稿では、統語的特徴にのみ基づいて分類を行っているため、AF としたが、意味的には PF 的側面も否めない。このことは、後述するように本稿の分析を裏付けるものである。

b. 傘が強風でひっくり返っている。（PF1）

c. 男性が突風に煽られています。（PF2）

d. 強風で傘がとばされそうです。（PF2）[10]

（15）a. The wind blew his umbrella away. （AF）

b. A man holds an umbrella on a windy day. （PF1）

c. A man's umbrella has been blown away by a strong wind. （PF2）

（16）a. 颱風把雨傘吹走了。（AF）

b. 傘飛了。 （PF1）

c. 傘被吹走了（PF2）

英語母語話者においては、これらの事態を AF で描写するものが多く、日本語母語話者は P F で描写するものが多い。そして、中国語母語話者については、AF 寄りの英語と PF 寄りの日本語のちょうど中間くらいの割合を占めている。これらのことから、事態把握という認識レベルにおいても、英語母語話者は、Action chain の開始点である参与者により焦点を当て事態を捉える傾向があり、中国語母語話者、日本語母語話者の順で、その action の向かう先である参与者に焦点を当てて事態を捉える傾向が強まると言えるのではないだろうか。この傾向は事態の参与者がいずれも〈人〉であった場合も同じである。次にそれを見たい。

《Human → Human》

以下の図 5-1、図 6-1、図 7-1、図 8-1 に描かれている事態は、いずれも〈人〉の行為が〈人〉に対して向けられていると捉えられる事象構造である（同構造を《Human→Human》と表記する）が、これらの画像に関しても英日中の話者の描写の各タイプの比率は、上

[10] 〈人〉、〈傘〉のいずれを主語としている場合も、Action chain の始点である〈風〉ではなく〈風〉の働きかけの向かう先である Patient に焦点があたっていると考えらえるため PF として分類した。

記と同じような傾向が見られる。すなわち、英語母語話者は、AF の描写が多く、中国語母語話者、日本語母語話者の順で、PF の描写が多くなるのである。

図 5-1

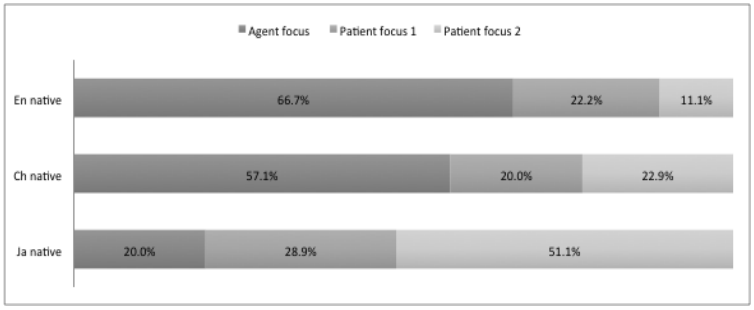


図 5-2（χ^2（4）= 23.190、p<0.1）

（17）a. 社長が部下を叱っています。（AF）
b. 偉そうな上司に部下が謝っています。（PF1）
c. 部下が課長に叱られています （PF2）

（18）a. A boss is yelling at his worker. （AF）
b. An employee is giving an excuse to boss. （PF1）
c. Somebody's just been fired, … （PF2）

（19）a. 老闆蹺腳罵員工。（AF）
b. 屬下跟上司道歉。（PF1）
c. 被老闆指責。（PF2）

図 6-1

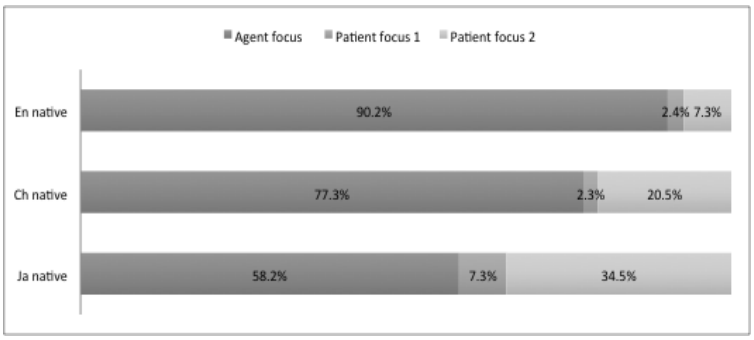


図 6-2（χ^2（4）= 13.236、p<0.5）

（20）a. 警察官が容疑者に銃を向けています。（AF）

b. 犯人が警官に捕まります。　（PF1）

c. 犯人が警官にとりおさえられました。　（PF2）

（21）a. A fat policeman is holding someone at gunpoint.　（AF）

b. A person under arrest.　（PF1）

c. Purported criminal is being arrested.　（PF2）

（22）a. 警察用槍指著嫌犯。（AF）

b. 嫌犯投降了。（PF1）

c. 被壞人挾持。（PF2）

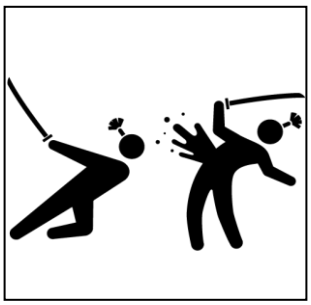


図 7-1

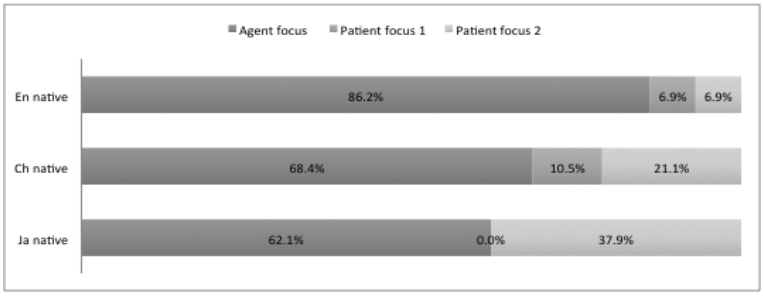


図 7-2（χ^2（4）= 10.271、p<0.5）

（23）a. 侍が相手を斬っています。(AF)

b. 斬り合いで一人の侍が切られた。（PF2）

（24）a. One samurai has just slashed another one in the side. (AF)

b. Someone just lost a sword fight.　（PF1）

c. One guy got cut wide open in the stomach.　（PF2）

（25）a. 日本武士殺另一個武士。　（AF）

b. 打架後受傷了。　（PF1）

c. 一個日本武士被擊中了。（PF2）

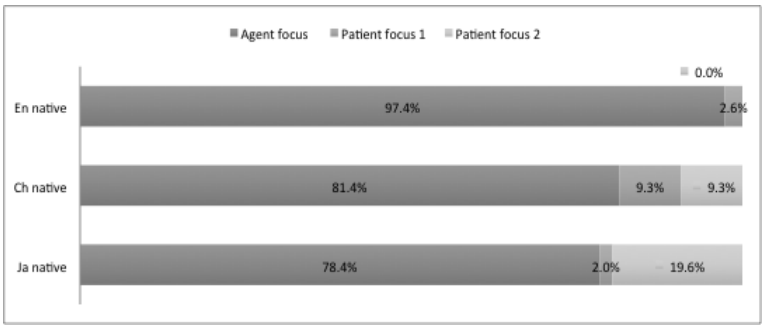


図 8-1　　図 8-2（χ^2（4）= 12.202、p<0.5）

（26）a. 女性が男性にキックしているところです。（AF）
　　b. 浮気がバレて彼女の怒りを買った。（PF1）
　　c. 女性に蹴りを入れられた。（PF2）
（27）a. A woman is kicking a man in a suit.　（AF）
　　b. A man gets a kick in the pants from a woman.（PF1）
（28）a. 女生飛踢男生。　　（AF）
　　b. 男生惹女朋友生氣。（PF1）
　　c. 被女朋友踢。（PF2）

このように《Human→Human》である画像と《$\overline{\text{Human}}$ →Human》である画像のいずれにおいても、英語母語話者においては AF の描写が最も多く見られ、中国語母語話者、日本語母語話者の順で、PF で描くものが多くなる。両者で異なるのは、《Human→Human》の画像においては、中国語・日本語母語話者の AF の割合が増えており、《$\overline{\text{Human}}$ →Human》の画像ほどは、各言語話者の描写の割合の違いが大きくないことである。

3. 考察

3.1 日本語・英語の事態把握

こうした調査の結果から、伊藤（印刷中）では、特に英語と日本語を対象に、事態のどの参与者に焦点をあてて事態を捉えるかを決定する要因のうち、どれがより強く機能するかが言語間で異なるという可能性を指摘した。

すなわち、英語母語話者は、参与者が〈動作主〉、〈Action Chain の始点〉であることを焦点を当てるためのより重要な要因とし、一方、日本語母語話者は参与者が自らと〈近い〉存在であること（例えば〈人〉と〈動物〉を比較した場合、前者の方がより話者と「近い」存在と感じられる）が、そこに焦点をあてる際のより重要な要因となるという可能性である。

このように考えることによって、《$\overline{\text{Human}}$→Human》である図 1-1、図 2-1、図 3-1、図 4-1 のほうが、《Human→Human》である図 5-1、図 6-1、図 7-1、図 8-1 に比べて、英語母語話者と日本語母語話者との差がより顕著に現れることにも説明を与えた。前者に現れる鮫や牛といった〈人以外〉の Agent は、当然、話者とは異なった存在であり、心理的な距離が大きく、日本語母語話者にとっては、焦点を当てる対象になりにくい。一方、Patient である〈人〉は話者と〈近い〉存在であり、その結果、Patient である〈人〉に焦点を当てる割合が高くなる。しかし英語話者にとっては、参与者の話者からの〈近さ〉は、焦点を当てる際の動機付けとしては強くないため、Agent である〈人以外〉の参与者に焦点があたりやすくなり、英語母語話者と日本語母語話者での描き方の差が大きくなる。一方、《Human→Human》の画像においては Agent は全て〈人〉であり、その意味では、《$\overline{\text{Human}}$ →Human》の画像における Agent よりは、より〈近い〉存在であると言える。したがって、日本語話者においても、Agent に焦点をあてる動機づけが増し、その分、英語母語話者と日本語母語話者での描き方の差が縮まったと考えることができるのである。

3.2 日本語・英語の事態把握

このように、伊藤（印刷中）では、対比的な振る舞いを見せる日本語と英語については考察を行ったが、AF タイプ、PF タイプのいずれを偏重しているとは決定しがたい中国語についての考察には至っていなかった。そこで本稿では、中国語話者の事態描写の特徴を

含めて考察をさらに進めたい。

中国語母語話者は同じ事態を、AF、PF のいずれでも描写する。例えば、図 5-1 に典型的に見られるが、(1) のように AF の描写が 57%、PF の描写が 43%とそれぞれがほぼ同じくらいの割合で存在する。

図 5-1（再掲）

（29）老闆　蹺　腳　罵　員工。（AF）（再掲）
boss　raise　foot　abuse　subordinate

（30）a. 屬下　跟　上司　道歉。（PF1）（再掲）
subordinate　to　boss　apologize

b. 被　老闆　指責。（PF2）（再掲）
PASSIVE　boss　scold

しかし、常に両方の捉え方に基づいた描写が同じ程度可能というわけではなく、画像によって AF 寄りになるものもあれば、PF 寄りに傾くこともある。そして興味深いことにそれらの変動は、まさに英語母語話者と日本語母語話者の描き方の割合のちょうど中間に位置するような形で起こるのである。

ということは、中国語においても、英語・日本語と同様に、Action chain の始点であること、話者の参与者に感じる〈近さ〉が、焦点を当てる先の選択に関与していると考えるのが自然であろう(むしろ、こうした認識のあり方に関する決定要因が、各言語において大きく異なるということは考えにくい)。

しかし、中国語話者においては、AF、PF の割合が、完全に英語

寄り、あるいは日本語寄りとなっていないわけであり、その要因についても考えなければならない。

本稿では、この要因を、Tai（1985）で述べられている時間順序原則（the Principle of Temporal Sequence、以降「PTS」）に求めてみたい。

The Principle of Temporal Sequence

The relative word order between two syntactic units is determined by the temporal order of the states they report in the conceptual world.

（Tai1985:50）

すなわち、中国語においては、二つの統語的単位の相対的な位置関係を概念領域におけるそれぞれの時間的な順序が決定する、ということであり、（31）（32）に示すように、句レベルの構成要素の順序、あるいは節レベルの構成要素の順序が、中国語においては、この PTS によって規定されていることがわかる（一方で、英語はこの PTS には従っていない）。

（31）a. 他 *念-完-了* 這本書。　（Tai1985:53）

1　2　3

He ***has finished reading*** this book.

3　2　1

b. 他 *做-成-了* 這件工作。

1　2　3

He ***has succeeded*** *in* ***doing*** this job.

3　2　1

（32）a. 他 <u>坐　公車</u>　<u>到　這兒</u>。　（Tai1985:54）

1　2

He ***came*** here, ***riding*** bus.

2　1

b. 他 到這兒 坐公車。
1 2
he ***came*** here to ***ride*** in a bus.
1 2

Tai（1985）によれば、この PTS は中国語文法の中で、もっとも普遍的な原則とされる。中国語は、無標な環境では時間軸に沿って先に起こった事象は〈前〉、その後に起こる事象は〈後〉という統語構造を成しており、認識の順序は語順と一致しているのである。

この PTS に従えば、中国語では、英語のように、〈動作主〉に焦点をあてた Agent Focus のタイプでの描写が多くなることが予測される。なぜなら、参与者が〈動作主〉と〈被動作主〉と捉えられる事態においては、常に前者の行為が時間的に早く生起するからである。例えば、以下の画像においては、中国語の描写はいずれも AF のタイプが過半数を超える。

図 5-1

図 6-1

図 7-1

図 8-1

（いずれも再掲）

しかし、図 1-1～図 4-1 のように、Action Chain の始点にある参与者が〈人以外〉である画像については、AF の割合はずっと低くなり、いわば日本語寄りの描写が増えることになる。

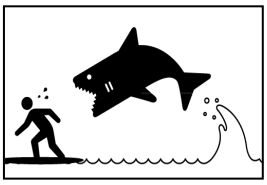


図 1-1

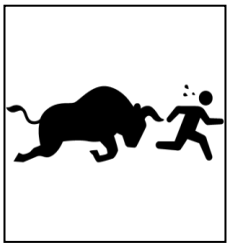


図 2-1

図 3-1

図 4-1

（いずれも再掲）

この事実はどのように捉えたら良いであろうか。本稿では、中国語においては、基本的には PTS に従って事態把握（描写）が行われるが、その一方で、日本語のように参与者の〈近さ〉も、そこに焦点を当てる重要な決定要因となっており、その二つの原則が特に《$\overline{\text{Human}}$→Human》の場合において、衝突するのではないかと考える。

すなわち、参与者のいずれもが〈人〉である《Human→Human》の事態の場合には、比較的両者とも話者と〈近く〉、単純に PTS に従って、事態把握が行われる。しかし、〈被動作主〉が〈人〉、〈動作主〉が〈人以外〉である《$\overline{\text{Human}}$→Human》の場合、PTS においては、2 番目に位置するべき参与者のほうに、より〈近さ〉を感じてしまうことになり、PF の割合が上昇するものと思われる。

実際、いずれも《Human → Human》である下記のような事態の場合、衝突は起こらず、PTS のみに従うことになるはずであるが、〈被動作主〉の〈近さ〉によって AF、PF の割合に差が生じている。

図 5-1（再掲）

図 6-1（再掲）

上司が部下を怒る場面では PF タイプは、42%を占めるが、警察が犯人を逮捕する場面においては、PF は 22%に留まっている。これは、上司に怒られる部下は、話者自身が自らの身を重ねて捉えやすい（同情しやすい）、より身近な存在で、一方、逮捕される存在については、非日常的で、また悪事を働いた存在としても、自らと〈近い〉存在としては感じにくいからではないだろうか。このような〈近さ〉の感じやすさによって PF の割合が上下するものと考えられる。

このように、中国語話者にとって、焦点をあてる参与者を決定す

る要因は、時間順序原則（PTS）と、心理的な〈近さ〉の二つが特に大きいものと考えらえるのであるが、最後に、各言語において、なぜ焦点をあてる際の動機付けとなる〈近さ〉、〈Action chain の始点であること〉、〈PTS〉といった原理の重み付けが異なるのかについて考えて論を締めくくりたい。

4. 結語

本稿では、伊藤・王（2015）による英語・中国語・日本語の各母語話者の事態把握の「型」を探るための各言語の母語話者による様々な画像の描写の調査の結果、また伊藤（印刷中）による同調査結果の分析に基づき、各言語話者の「型」（その中でも焦点をあてる参与者の選択）について、その違いの要因を考察した。

調査では、英語母語話者は AF で描写を行う傾向が強く、この傾向は中国語母語話者、日本語母語話者の順で弱まること、さらに、《$\overline{\text{Human}}$→Human》の画像と《Human→Human》の事態では、前者のほうが言語間の傾向差が大きいという事実が示されていたが、本稿では、これらの事実から、各言語話者の事態把握のあり方について下記のようなメカニズムが働いていることを示唆した。

(1) 英語母語話者にとっては、〈Action Chain の始点〉と想定されることが当該参与者に焦点を当てる重要な要素である。

(2) 日本語母語話者にとっては、参与者の〈近さ〉が焦点をあてるための重要な要素となっている。

(3) 中国語母語話者にとっても、参与者の〈近さ〉が焦点をあてるための重要な要素となっているが、その一方で、その把握のあり方が PTS に沿っていることも重要な要素となる。

〈Action Chain の始点〉であったり、話者と〈近い〉参与者には焦点が向かいやすいこと、また事態を PTS に沿って捉えることは、も

ちろん、どのような言語話者にとっても、自然な事態把握の原理であると思われる。

では、これらの原理が各言語間で機能する際の重みづけが異なる理由は何であろうか。本稿では、それを各言語の特性に求めたい。具体的には、A）英語、日本語、中国語がそれぞれ、屈折語、膠着語、孤立語的な特徴を持っていること、また B）英語は、主語優先型言語であり、日本語、中国語が主題優先型言語であるということが、上記 1）～3）のメカニズムを生み出していると考える。

まず A）についてであるが、英語や日本語は、前置詞、後置詞、あるいは、語形変化等によって、各統語要素の関係性を明示できるゆえに、語順の制約が比較的少ない言語である。すなわち、PTS に沿った統語順でなくとも、その時間的関係性を示すことができるわけであり、そのように考えれば、PTS の規定は中国語ほど厳しくは機能しないことが考えられる。逆に孤立語的な性格の強い中国語においては、PTS はかなり強い制約として働くことになる。

一方で、中国語、日本語は、主題優先型の言語に分類されるが（Li&Thompson1976）、主題となる参与者は、Action chain の先頭といった物理的な要因ではなく、より話者の中で発話時に重要度の高いものといった観点から選択される（だからこそ、下記のように、様々な要素が主題に立てるわけである）。

（33）a.ここには、大統領が何度も訪れた。
（場所）
b.あんな奴とは、二度と一緒に出かけない。
（同伴者）
c.軽い風邪では、仕事は休めない。
（原因）
d.今日は、大きな火事がありました。
（時間）

（34）　那座房子幸虧去年沒下雪。（Li&Thompson1976:479）
（あの家は、去年雪が降らなくて良かった）

こうしたことに鑑みれば、日本語、中国語においては、話者がより〈近い〉と感じる参与者が、主題（調査のような現象文においては主語と等しくなる）として選択されやすくなるのも自然な帰結だと考えられる。

以上をまとめると、英語においては、PTS の制約が強くなく、また主語優先型であるために、Action Chain の先頭であるという客観的事実が焦点をあてる参与者の選択の際に最も重要な要因として機能し（従って、AF 的描写に傾く）、一方、日本語においては、同じく、PTS の制約は強くないが、主題優先型であるために、参与者の話者との〈近さ〉が焦点をあてる参与者の選択の際に重要な要因として働くことになる（従って、PF での描写に傾く）。そして、中国語においては、その孤立語的性格の強さゆえに PTS の制約が強く、AF 的描写に傾く動機づけと、主題優先型であるがゆえに、〈近さ〉も一方で、重要な焦点をあてる先の選択に重要な決定権を持ち PF 的な描写に傾く動機づけを同時にもつことになるのである。こうしたことから、AF 的描写を偏重する英語と、PF 的描写を偏重する日本語の、ちょうど中間的な位置を、中国語は占めることになると考えられるのである。

以上、本稿では、AF での描写か、PF での描写か、という観点から各言語話者の描写の比較調査の分析、考察を行ってきたが、これはあくまで事態把握のあり方の一つの側面を捉えたものにすぎない。また今後は、より言語に拠らない調査を用いて、この参与者への焦点の当て方の違いが、本当に認識のレベルのものであるのかについても検証していかねばならない。

しかし、本稿において、人間にとって自然であると考えられる事態把握の際の基準が複数あり、その運用が各言語の言語的特性によ

ってより強く働いたり、逆に抑制されたりするという、認識と言語的特性の関連性を指摘したことは重要であろうと自負している。なぜなら、この原理こそが、これまで論じられてきた各言語の事態描写の「型」を生み出している可能性が十分にあるからである。

参考文献

庵功雄、『日本語におけるテキストの結束性の研究』、くろしお出版、2007。

池上嘉彦、『「する」と「なる」の言語学』、大修館書店、1981。

池上嘉彦・上原聡・本多啓、「Subjective Construal とは何か」、『日本認知言語学会論文集』5、514-557、2005。

池上嘉彦、『英語の感覚・日本語の感覚』、日本放送出版協会、2006。

伊藤創、「言語間における事態の描き方の相違についての一考察」、『関西国際大学研究紀要』16、1-12 頁、2015。

伊藤創、「日本語・中国語・英語母語話者における事態参与者焦点化の決定要因の差異」、『関西国際大学研究紀要』17、（印刷中）。

伊藤創・王蓓淳、“Teaching English language with its perspective”、The Eighth International Conference of English as a Lingua Franca、2015。

小野寺美智子、「日英語の受動構文の認知的基盤「事態把握」の観点から」、『拓殖大学 語学研究』119、11-32,2008。

尾谷晶則、「いわゆる“対象のガ格”の正体を求めて―認知文法の観点から―」、『白馬夏期言語学会論集』12、45-60、2001。

金谷武洋、『日本語にも主語はなかった』、講談社選書メチエ、2004。

単娜、「日中両言語におけるダイクシス指示表現の比較対照—認知言語学的な観点による一考察」、『東京成徳大学人文学部・応用心理学部』18、123-133、2011。

徐愛紅、「〈事態把握〉から見た中日両言語の語り—語順を中心に—」、『創価大学日本語日本文学』21、57-68、2011。

谷口一美、『事態概念の記号化に関する認知言語学的研究』、ひつじ

書房、2005。

中村芳久、「主観性の言語学—主観性と文法構造・構文」、中村芳久（編）『認知文法論 II』、大修館、2004。

樋口万里子、「日本語の時制表現と事態認知視点」、『九州工業大学情報工学部紀要，人間科学篇』、九州工業大学 14、53-81、2001。

森田良行、『日本人の発想,日本語の表現−私』の立場がことばを決める−』、中央公論社、1989。

守屋三千代、「広告における受益可能表現-<事態把握>の観点より-」、『創価大学日本語日本文学』21、19-32、2010。

森山新、「認知言語学的観点を取り入れた格助詞の意味のネットワーク構造解明とその習得過程」、『平成 14～16 年度科学研究費補助金研究基盤研究（C）（2）成果報告書』、2005。

Langacker,R.W.“Subjectification”*Cognitive Linguistics*1, 5-38,1990.

Li, C. N. & Thompson, S. A. “Subject and topic-a new typology of language”, *Subject and Topic*, C. N. Li, ed., New York: Academic Press, 457-489,1976.

Tai, James H-Y. “Temporal Sequence and Chinese Word Order.” *Iconicity in Syntax*, John Haiman, ed., Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, 49-72,1985.

Yamamoto,M. *Agency and Impersonality Their Linguistic and Cultural Manifestations*, John Benjamins Pub Co, 2006.